

平成 28 年度 入学試験問題

国 語

(第 3 回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入しなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校



【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「学ぶ」ことの一つの大きな意味は、それがあることさえまったく知らなかった世界が開けてくることです。

たとえば、高校では新たに物理を学びます。ニュートンが発見した運動法則などを学ぶわけですが、この物理の授業の一つの目的は「こんな世界があったのか」と、自分の世界を広げることにあるといえます。

動物行動学という学問もあります。私は大学時代にこの動物行動学を学び、「こんな学問があったのか!」と衝撃を受けました。大いに興味を持ったので、オーストリアの動物行動学者であるコンラート・ローレンツの『攻撃』という本を読んてみたら、攻撃性の点では人間が一番ひどいことがわかりました。

動物の場合、けんかになってもある程度勝負がついたら、その時点で攻撃をやめます。相手が腹を見せたら降参の意味なので、勝っている側はもうそれ以上攻撃しません。しかし、人間はずっと攻撃し続けてしまう。

こんなふうに、新たな学問に触れることによって、「ああ、こんな世界があるのか」と知る。これは自分が新しい世界に開かれていくということです。

この「新しい世界に開かれる楽しみ」は憧れを※喚起し増幅していきます。

何かの学問に憧れを持ったとしましょう。学問は、学者の「新しい世界へ憧れる力」によって成立しています。この憧れのベクトルに自分の憧れが喚起される、あるいは自分がそれに引き寄せられていくような構図で、どんどん自分の中に新しい世界が開かれ、広がっていきます。

その後、一人の優れた他者、たとえば心理学者のフロイトと出会うとします。フロイトは巨人ですから、もし現実には彼と出会ったら、彼を目の前にした同じく心理学者のユングみたいに別れるのが大変になってしまうと思います。優れた人間はいっしょにやっっていくのが難しいうえ、別れるのも大変なんです。

ましてやそれがフロイトのように偉大な人だと、あまりに身近で話を聞くと別れるのがつらくなる。だから、亡くなっている人で良かったと思える面もあります。

ニーチェもそうです。もっと大変な人物なので、ニーチェの本を読んでいる分には落ち着いていられますが、もし目の前にいたら厄介すぎてつき合いきれないでしょう。

そんな強烈すぎる偉人たちから少し離れて、その強烈な人間観・世界観を学ぶと、彼らが「自分の内なる他者」として自分の中に住みつきます。この多様で生命力にあふれた他者が住む「森」^①のようなものをつくるという点が「学ぶ」ことの一つの大きな意味です。

(中略)

ガリレオは実証主義を取り入れた点で、近代科学の父と言えます。たとえば、^aボウエンキヨウで天体を観察しました。また、^{斜面}にボールを転がして落とす実験を試みて、^{加速度に近い}概念にたどり着きました。

物が加速して落ちるのはいまでは当たり前の概念ですが、それまでは等速で落ちると信じられていました。しかし、実際に見てみれば、加速していることが誰でもわかったと思います。それなのに、^{試し}もせずに、等速だとずっと信じていたわけです。

学ぶことは、いわばそうした常識を^{突き崩}していくことでもあります。それまで信じていたことが、「えーっ、^{違うんだ}」とわかった瞬間、とても学んだ気がすると思います。

たとえば、同じ高さにある二つのボールを、そのまま真下にポトッと落とした場合と、水平に投げた場合を考えてみましょう。空気抵抗を計算に入れなければ、着地までの時間は同じです。

ところが、そのまま真下にポトッと落としたほうが、早く着地するように思えるはずです。たとえ時速三百キロ、五百キロものスピードでボールを放出したとしても、ボールにかかる重力は一定なので、着地までの時間は同じ。もちろん、空気抵抗があるので、実際のデータは少し変わります。

もし自分が小学生だったとして、このボールの落下に関する実験結果を目の当たりにしたら、持っていたイメージと全然違うので、「えーっ」と^{驚く}はず。そこには学びが起きているのです。

そうした学びはあらゆるところで起きます。たとえば、私たちはゴッホによっても学びが起きます。「これも絵なのか」、「こんなふう^に描いてもいいんだ」と、驚くことによつて学ぶわけですから。

そのゴッホは何に学んだかというと、^{浮世絵}に学びました。北斎の絵を見て、「こんな構図でいいのか」という具合です。

北斎の構図はマネやゴッガンがまねをし、モネも^{影響}を受けています。さらに、構図だけでなく、^{色彩}や輪郭線の面で、あるいは職人としての生き方の面で、彼らは北斎に影響を受けているのです。

かつての日本人は画家を芸術家というより職人ととらえており、北斎などの浮世絵師自身にも画家であるという意識はありませんでした。ゴッホは職人としての浮世絵師である北斎から影響を受け、「こういう構図があってもいいのだ」という驚きがあつて、自分の絵で試してみたのです。ゴッホがそんなふうに出てくると、そのゴッホにゴッガンやセザンヌが驚き、ゴッガンやセザンヌも世間の多くの人々を驚かせました。

A、自分より前のものに驚き、それを全否定するのではなく、アレンジして取り入れるわけです。印象派の時代は画家が^{お互い}に「そうじゃないだろう」と言い合い、諸子百家のころのように、みんなが「自分はこれだ」と主張し合っていた華やかなときです。

B 人気があるのだと思いますが、その陰には華やかな学び合いがあるとともに、「えっ！」と驚いて自分の^{既成概念}を自ら壊していった点があつたことも見逃せません。

そんなふう^に、自分の考えが崩れていくことを喜びと思える点も、学びの良さです。

C、自分を全否定する必要はありません。全否定ではなく、軽くずれていく感じがいい。そのずれを柔らかく取り入れ、ずれを生かして時に大きく転換することのできる人が学ぶことのできる人間なのです。

D、そのとき過去から何を学ぶかによって、人はホシユと革新に分かれます。

過去を否定するより、過去の成功例や良い例から学ぶのがホシユ。一方、過去を間違っている
と否定し、次のものに行くのが革新です。

それは、気質によっても違ってくるでしょうし、初代の人がやるのと三代目や五代目がやるのでも違いが出るでしょう。ただ、常に更新していかねければならないのは確か。生物の進化のプロセスのようなものを更新して状況に合わせていく。そんな人が結局は強いのです。

※ちっじょ 秩序立てて学ぶことも一つの学びではありますが、カオス（※こんとん 混沌）を通じて新たなコスモス（秩序）にたどり着いたとき、それはより本質的な学びとなります。

もつとかみ砕いていえば、自分が考えを壊されたことで混乱し、「何だっけ、何だっけ」と考えた末に、「ああ、そういうわけか」と新たな秩序にたどり着く。そんなとき、学びはより本質的なものになるということです。

その場合、精神的に少し疲れますが、それを心地よい精神の運動ととらえる。スポーツのように、疲れても心地よいのが 本質的な学びです。自分に負荷がかかり、ある種の混乱があるからこそ面白いのです。

たとえば、トラブルがあったとき、「トラブルがアイデアを引き寄せるんだ」ととらえ、「困っちゃったね」と笑いながら前向きに話し合えるチームがあるとします。

どんなチームでも、強い相手と当たると自分たちのシステムが思いどおりに動かず混乱するものです。しかし、そのチームは混乱の中でパニックに陥ってダメージを受けるのではなく、試合中にメンバーの位置などを シュウセイし、新しい秩序で戦えるはずです。そんな作業がメンバーにとつての醍醐味とすると、それは試合中に学んでいることとなります。

後述するソクラテスやプラトンがそうですが、古代の偉人や思想家は問いかけをすることによって、相手の思い込みや 固定観念を上手に崩しながら、次のところに ミチビいていきました。なぜそれほど問いかけをするのかというと、その人が「いままでの考えでいいのだろうか」と自問自答する姿勢をつくるためです。とにかく自分に問いかける姿勢をまずつくってもらおう。そして、固定観念が崩れる楽しみを一度味わうと、その人は「もつと崩してくれ」という感じになっ
てくるものなのです。

「学びの基本は自分の固定観念を崩し続けること」

これを強く主張したのが、小学校の先生であり、昭和の代表的な教育者といわれる斎藤喜博さんです。

この先生は「子どもたちをどう揺さぶるか」という言葉をよく使いました。

たとえば、「森の出口」と名づけた授業を行なっています。これは子どもたちに、「本当にそ

こが森の出口なのか」、「森の出口は森から出た所じゃなくて、もつと奥^{おく}で出口の光を見つけたあそこじゃないの」などと揺さぶりをかけるというもの。

「揺さぶる」というのは固定観念を否定して、生徒を一度混乱^{おとし}に陥れることです。この考え方は固定観念が砕かれることをむしろ良しとします。「^④概念^か砕^くき」を学びの核^{かく}にするわけです。

すると、アイデンティティ（自己^じ己^ごの存在^{そん}証明^{めい}）の[※]とらえ方が変わってきました。「柔軟^{じゅうなん}に変容^{へん}できることが自分の基本なんだ」というアイデンティティを持つと、固定化していないので状況変化に強くなる。学ぶ人間は状況変化に強く、ストレスが少なくなっていくのです。

ストレスは誰にでもかかってくるもので、社会的な地位が高い人には高いなりのストレスがかかります。ならば、困難に対してどれだけストレスを感じるかが問題です。

^⑤困難をゲーム化してとらえられる人はストレスが[※]相対的に少なく、「トラブルは常にある。こういうものなんだ」と考えることができます。

それがもつと^eハッテンすると、「トラブルが来たからには、これはチャンスだ」、「このトラブルを解決したら、ほかの人にはないノウハウが得られる」と考え、お金を払^はつてでもクレームを集めるようになります。トラブルから学ぶわけです。

（齋藤 孝『人はなぜ学ばなければならないのか』より）

※喚起……呼び起こすこと。

※概念……ある事物の大まかな意味内容。

※既存概念……広く社会で認められ、通用している概念。

※秩序……物事の正しい順序。

※混沌……すべてが入りまじって区別がつかないさま。

※固定観念……いつも頭から離れないで、その人の思考^{しこう}を拘束^{こうそく}するような考え。

※存在証明……そのものが確かに存在すると証明すること。

※相対的……他との関係において成り立つさま。また、他との比較^{ひかく}の上に成り立つさま。

問1 —— 線 a ~ e のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 空らん A D にあてはまることばの組み合わせとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|---|------|
| 1 | A | 要するに | B | だから | C | しかし | D | ちなみに |
| 2 | A | だから | B | しかし | C | 要するに | D | ちなみに |
| 3 | A | だから | B | 要するに | C | しかし | D | ちなみに |
| 4 | A | ちなみに | B | だから | C | 要するに | D | しかし |
| 5 | A | 要するに | B | ちなみに | C | だから | D | しかし |

(問題は次のページに続く)



2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「ヒロシ」の入学した中学のサッカー部は、上下関係に厳しい部活であった。どんなにサッカーが上手くてもボールも蹴らせてもらえず、ただ球拾いとウサギ跳びをするだけの毎日であった。「岡本」をはじめ、多くの一年生が三年生からのシゴキに耐えかねて部を去って行った。しかし、「秋山コーチ」が就任してから、次第に実力重視のメンバー選考が行われるようになり、「ヒロシ」もスタメンに抜擢されることになった。

レギュラー中心の練習がつづく。あの日円陣に残った部員が練習に参加するのは、人数合わせでピッチに入るときぐらいのもので、あとはずっと球拾いと声出しだった。

ベンチ入り十六名の中の競争も、二、三日のうちに結果が出た。

飯島さんは国岡さんとのコンビネーションを繰り返し練習し、オレはディフェンスのフォーメーションを徹底的に教え込まれた。他のポジションはスタメンとサブが交互にプレイしていても、飯島さんとオレは出ずっぱりだった。

グループ分けの一週間後、部室のドアに金山さんの退部届が挟んであった。練習が終わって部屋に引き揚げるときに「アホらしゅうてやつとられんわ！」とラインマーカーを蹴飛ばした翌日のことだ。

だが、青田さんは毎日欠かさず練習に出てきた。円陣組と一緒に球拾いをつづけた。オレたちが入部して以来、青田さんが練習を休んだことは一度もなかったのだと、その頃になってようやく気づいた。

ボールを追っていると、ピッチの外にいる青田さんの姿がときどき目に入る。たいがい、うつむいて爪を噛んでいる。青田さんを見たあとは、いつもつまらないミスをして秋山コーチに怒鳴られてしまう。メガホンで頭をはたかれることもある。それでも、秋山コーチは、オレの代わりに青田さんをピッチに入れようとはしなかった。

「金山さんには悪い思うけど、実力の世界じゃけんの。まあ、順当なところじゃろ。アホタもベンチ入りできただけで幸せよ、ほんま」

飯島さんはあっさりと言う。

だが、オレは一緒になつてうなづくことができない。

「いずれおまえもフォワードに回る思うけど、この時期にディフェンスをやっとくんはええことよ。英才教育してももうとるのう」

「……いや、そんな……」

「どないしたんか、二階級特進なんじゃけん、もっと元気出せえや」

わかっている。オレは、実力でレギュラーポジションを勝ち取ったのだ。他の誰でもない、オレ自身の力が、青田さんや円陣組の連中より上だったのだ。気を遣うことはないし、負い目を感じ

じる必要もない。わかっている。嫌になるほどわかっている、それは。

オレの顔を覗き込んで「緊張しとるんか？」と笑った飯島さんは、「そげん硬くなるな。べつに今度の大会で勝たんでも、ワシらには未来があるんじゃないやけん」と笑みを深くした。

しかたなく付き合った X は、鏡がなくてもはつきりとわかる、入部初日に風呂場で泣いたときと同じようにしよぼくれていた。

大会を十日後に控えた昼休み、岡本に「ヒロシ、ちよつとええか？」と廊下呼び出された。

二期期に入ってから、岡本をグラウンドで見かけることが減っていた。ちよつとした喧嘩がもとでテニス部の一年生全員から無視されているらしい、と噂で聞いた。

オレと向き合うと、岡本は視線を落ち着きなく動かしなかった。

「最近、サッカー部もええ雰囲気になってきとるのう。一学期とはえらい違いじゃ」

「まあ、の」

「ヒロシ、アホタの代わりにスタメンに入ったんての。すげえもんじゃのう」

「……そげなこと、どうでもよからうが。用事があるんなら早うせえや」

岡本はビクッと肩を揺すり、さつきまでよりもさらに落ち着きを失った様子で用件を口にした。

①「三年生が引退したら、ワシも戻ろうか、思うとるんよ」

「……………」

「やっぱりの、ワシ、サッカーが好きじゃけん。テニスもええけど、サッカーが一番よ」

「……………」

「ま、あれじゃ、ほれ、いつペンやめた者が入り直しちゃいけんいう決まりはないんじゃないの。

の？ べつに、ヒロシが入るな言う権利はないんじゃない……」

アホか。声には出さなかったが、 Y を返して教室に戻る仕事すべてで、それを伝えた。

「ちよつと待ってくれえや」と岡本はオレに追いつがり、「そうじゃそうじゃ、面白え話があるん

よ、ええこと教えたるわ」と、行く手をさえぎるように前に回り込んだ。

「べつにええよ、そこ、どけや」

「まあ、そない怒るなや。ほんま、面白え話なんじゃけえ」

聞くつもりはなかった。

だが、岡本の口から青田さんの名前が出たとき、足が勝手に止まった。

「アホタに弟がおるの知つとるか。小学四年生なんじゃけどの、アホタ、夜になったら公園で弟と一緒にサッカーしよるんよ。弟が相手じゃけえ、もう、威張る威張る、えらそうに講釈垂れよるらしいで。哀れなもんじゃのう、ほんま」

② オレは岡本の肩を小突いて脇にどかし、教室に戻った。

土曜日の練習後、明日の試合に使うユニフォームを渡された。

オレのゼッケンは2。

16番のユニフォームを小脇に抱いた青田さんは、いつものようにうつむいて爪を噛みながら秋山コーチの話聞いていた。

③ ちくしょう……。

青田さんの履いているスパイクの脇に「2」と書いてあるのが、目に入ってしまった。

日曜日。

集合時間より三十分早く市営グラウンドに着いたオレは、そのまま駐車場に向かい、秋山コーチが来るのを待った。

間違つたらんよな、と自分に尋ね、だいじょうぶ、何度も言い聞かせた。

ゆうべ、家に帰ってからずっと考え抜いたのだ。机の上にゼッケン2のユニフォームを広げ、嫌というほどため息をついたすえに出した結論なのだ。

秋山コーチの車が駐車場に入ってきた。オレはスポーツバッグを提げて駆けだした。

これでええんよな――。

最後に自分に訊いた。

バッグの取っ手を深く握り直した。

車から降りた秋山コーチは、オレに気づくと「どないしたんか、早うユニフォームに着替えてウォーミングアップせんと間に合わんぞ」と言った。

オレは黙って、スポーツバッグからユニフォームを取り出した。

迷いとためらいを振り切って早口に言った。

「青田さんのユニフォームと替えてください」

「はあ？」

「あの、僕は、16番でええです。青田さんは三年生で、先輩ですから、2番の方がええ思います」

「……………」

「お願いします」

ユニフォームを両手で差し出して、頭を深々と下げた。

だが、秋山コーチはなにも応えず、ユニフォームを受け取る気配もない。

おそるおそる顔を上げると、秋山コーチはオレをじっと見つめていた。険しい顔だった。

「青田が、そない言うてこい、言うたんか」

オレは慌てて首を横に振る。

「ほなら、2番でええじゃろうが。スタメンで出るんじゃけえ」

「いえ、でも……………」

「青田に言われたんじゃろ？ 違うんか。正直に言うてええど、べつに青田に言いつけたりはせ

んけえ」

「違います。僕が、勝手にお願いしよるだけです」

「ほいじゃつたら訊くがの、なして、おまえが2番じゃいけんのか」

「……………」

「なして、青田が16番じゃいけん思うんか。うん？ 先輩じゃからか？」

「……僕は、来年も再来年もありますから」

秋山コーチは晴れ渡った空を見上げて、ふうん、と小さく応え、オレに視線を戻すと同時にぴしゃりとした口調で言った。

「同情か？」

いいえ、と答えようとしたら、喉がキュツとすぼまった。声も、息も出せない。オレは言葉の代わりに首が痛くなるぐらい激しくかぶりを振り、④ユニフォームを車のボンネットに投げ捨ててその場から走り去った。

グラウンドの外の集合場所では、すでにオレ以外の全員が揃ってストレッチをしていた。

青田さんもいる。ゼッケン16のユニフォームを着ている。背中の数字が一桁から二桁に代わったせい、⑤春の大会のときよりさらにユニフォームがぶかぶかに見える。

飯島さんが膝を屈伸させながら声をかけてきた。

「ヒロシ、おまえなにしようったんか。ビビってケツまくったんじゃろうか思うたで」

「……すみません」

「ま、ええわい、早う着替えてストレッチ組もうや」

「……………」

「更衣室まで行かんでもよかる。ワシらもここで着替えたんじゃけえ」

「……………」

逃げるように背後を見ると、タイミングよく秋山コーチが来てくれた。

「ちよつと青田、来いや」

秋山コーチは青田さん呼び寄せて、ゼッケン2のユニフォームを渡した。

「持つべきもんは先輩思いの後輩じゃのう。これからも、ヒロシのこと、ようかわいがっちゃれよ」

秋山コーチの皮肉めいた口調は、なんだか青田さんではなくオレに向けられているみたいだった。飯島さんもあきれはてた顔でオレを見ていて、近くにいた三年生も、なぜだろう、みんなオレを見ているのだった。

「今青田が着とるほうは、すぐに脱いでヒロシに渡しちゃれ。時間もないけん、早うせえよ」

青田さんは黙ってうなずいた。

Z。

「役員テントに挨拶してくるけん」と秋山コーチがその場を去るのを待って、オレを振り向いて言った。

「……横着じゃのう……」

声が震えていた。吊り上がった細い目が赤く潤んでいた。

胸倉をつかまれた。

思わずその手を振り払ったら、横から別の誰かが殴りかかってきた。

石塚さんだ——と気づいた瞬間、目の前で光が弾け飛んだ。

飯島さんに抱え起こされた。泣いたつもりはないが、涙が止まらない。

「ヒロシ、おまえがいけん、おまえが悪いんじや。わかってるの、あげなことしちゃいけんのよ」と飯島さんが言う。

オレは地べたにへたりこんだまま、嗚咽交じりにうなずいた。

殴られて、やっとわかった。⑥ 自分がコドモだということを思い知らされた。

飯島さんの後ろに、スポーツバッグが何人分かひとかたまりで置いてある。青田さんのバッグがいつとう手前だった。マーカーで「2」と書いてある場所に、ガムテープが貼られていた。

石塚さんがオレのそばに来て、「すまんかったの」と低い声で言った。

オレは黙って首を横に振る。

「これ、おまえのじや」

石塚さんはゼッケン2のユニフォームをオレの肩にかけた。

すみません……。

口を小さく動かしたが声にはならなかった。

もう一度言い直そうとして、やめた。これ以上顔を動かすと、また涙があふれ出て、小学生みたいにわんわん泣いてしまっそうだった。

(重松 清「ウサギの日々」より)

問1 空らん X・Y に入ることはとして最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

X	1	せせら笑い	2	愛想笑い	3	薄ら笑い	4	苦笑い	5	照れ笑い
Y	1	掌 <small>てのひら</small>	2	腕 <small>うで</small>	3	踵 <small>かかと</small>	4	衣 <small>ころも</small>	5	裏

問2 空らん Z に入ることはとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 しかし 2 そして 3 だから 4 つまり

問3 線①「三年生が引退したら、ワシも戻ろうか、思うとるんよ」とありますが、この発言の真意として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 「ヒロシ」のスタメン入りにより、サッカーへの情熱を取り戻した。
- 自分を無視するようになったテニス部の一年生を見返してやりたかった。
- 一度サッカーから離れたことでもかえってサッカーの楽しさを実感した。
- テニス部に自分の居場所をなくし、サッカー部に拠り所を求めた。

問4 線②「オレは岡本の肩を小突いて脇にどかし」とありますが、ここから読み取れる「ヒロシ」の心情として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- サッカー部に戻ろうとする「岡本」の身勝手な考え方に加え、えらそうに弟にサッカーを教える「青田」の態度も、ともに理解できずにいらだっている。
- 「岡本」から聞いた「青田」の弟に対する態度は、サッカー部での後輩に対する態度と同様で、弟の置かれた状況を自分の境遇と重ねて同情している。
- 「青田」の話など興味すらなかったにもかかわらず、お構いなしに話を進める「岡本」の配慮のなさにも憤りを感じ、話の内容にも憤りを感じている。
- サッカー部に身勝手な理由で戻ろうとする岡本の考えに加え、毎日休むことなく部活に來ている「青田」を馬鹿にするような態度を腹立たしく思っている。

問5 線③「ちくしょう……」とありますが、ここに表われている気持ちとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- ゼッケンが二桁にかわったことに対する悔しさ。
- 一年生にレギュラーを取られてしまった怒り。
- 見たくなかったものを見てしまったいらだち。
- 「青田」の未練がましい行為に対する憤り。

問6 ——線④「ユニフォームを車のボンネットに投げ捨ててその場から走り去った」とありますが、この時「ヒロシ」はなぜ「走り去った」のですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「秋山コーチ」がチームの勝利を思っつての自分の提案を理解してくれない不満から。
- 2 「秋山コーチ」に自分自身の浅はかな考えを指摘されたように感じた動揺から。
- 3 「秋山コーチ」の問いかけに対して思わず嘘をついてしまったことへの罪悪感から。
- 4 「秋山コーチ」の自分への執拗で容赦のない問いかけに対するいらだちから。

問7 ——線⑤「春の大会のときよりさらにユニフォームがぶかぶかに見える」とありますが、そのように見える理由として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 これまで〈2〉というゼッケンで隠れていた「青田」本来の姿が、「ヒロシ」の目に映ったから。
- 2 これまでゼッケン〈2〉を背負ってきた「青田」にはふさわしくない番号を付けているから。
- 3 レギュラーを獲得した「ヒロシ」は、自信に満ちあふれていて先輩の存在を軽く見ているから。
- 4 番号が二桁にかわったことで、「青田」に対する「ヒロシ」の尊敬の念が薄れてきているから。

問8 ——線⑥「自分がコドモだということを思い知らされた」とありますが、「ヒロシ」はどのような点から自身が「コドモ」であると感じたのですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 一桁の番号へのこだわりからなかなかゼッケンを譲るといふ結論を出せなかったため、結果として「青田」を深く傷つけることになってしまった点。
- 2 自分本位な考えで先輩にゼッケンを譲るといふ、相手の気持ちを考えない行動により、「青田」をより一層傷つける結末になってしまった点。
- 3 「秋山コーチ」のひいきによって得た地位を自分の実力と勘違いして、試合の当日までゼッケンを「青田」に譲らず先輩たちの反感を買ってしまった点。
- 4 「飯島さん」に三年生には絶対に同情はするなと忠告されていたにもかかわらず、それを無視してゼッケンを譲りチームの和を乱してしまった点。

(問題は次のページに続く)



3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。なお、表記は現代かなづかいに改めました。

電車の中で

釣草つりくわに吊ぶらさがつている
眼めのまえに白い髻ひげの老人が腰こしかけている、
まっ白な、食塩しょくえんのようにまっ白な、
なんて美しい髻ひげだ。

わたしは考える、――

自分もいつか老人としよりになるだろう、

あんな髻ひげを持つようになるかも知れない、

嵐あらしのあとの朝の庭にわのような

① ころ静しずかな、懐なつかしい老年らうねん！

その時、今のわたしを悩なやませている

彼女かのじょの想おもい出ではどんな姿すがたになるのだろう。

釣草つりくわにさがりながら

わたしはしみじみと想おもう、

老年らうねんのわたしの白い髻ひげのかけに

□の中の水仙すいせんの花はなのよう

はつきりと咲さき出いでるであろう

② 彼女の美しいおもかげを。――

(西條八十『美しき喪失』より)

※『悲しき喪失』……一九二九年(昭和四年)刊行。

問1 この詩の文体と形式として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 口語定型詩
- 2 口語自由詩
- 3 口語散文詩
- 4 文語定型詩
- 5 文語自由詩
- 6 文語散文詩

問2 この詩で最も多く使われている表現技法を次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 直喩ちよくゆ(明喩)
- 2 隱喩いんゆ(暗喩)
- 3 倒置法とうちほう
- 4 擬人法ぎじんほう
- 5 対句たいく
- 6 体言止め(名詞止め)

問3 空らん に入ることばとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 塩 2 水 3 空 4 雨 5 雪

問4 ——線①「こころ静かな、懐かしい老年！」とありますが、ここにはどのような気持ちがかめられていると思われますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 以前どこかで会ったような、品のある老人になりたいという気持ち。
- 2 ほとんどしゃべることのない、物静かな老人になりたいという気持ち。
- 3 みんなの記憶に残るような、心やさしい老人になりたいという気持ち。
- 4 人生でさまざまな経験を積んだ、穏やかな老人になりたいという気持ち。

問5 ——線②「彼女」は「わたし」にとってどのような人だと思われますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 今では年をとってしまった昔の恋人だが、思い出の中では美しいまま残しておきたい人。
- 2 恋をしているから今も美しいと思うが、年をとってもきつと美しいと思えるであろう人。
- 3 今ではかすかな記憶になって顔は思い出せないが、美しかったことだけは思い出せる人。
- 4 ともに過ごしてきた今では互いに年をとったが、これからもいっしょにいたいと思う人。

問6 この詩の表現についての説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 電車で出会った老人を不思議な力のたとえに用いることで、今後の運命を予感させるような楽しい情景が描かれている。
- 2 電車という乗り物の中で過ごす場面から詩をはじめることにより、現代人のいそがしさやリアルに描かれている。
- 3 日常の風景によってわいてくる自分の思いが、現在と未来を行ったり来たりするかのように感情豊かに描かれている。
- 4 文字ではない記号を多く用い、本来とはちがう使い方をすることで混乱した夢の中のような暗い世界が描かれている。

4 次のア～オの熟語は、構成を考えると後の1～6のどの熟語と同じですか。それぞれ番号で答えなさい。ただし同じ番号は一度しか使えません。

ア 基本 イ 加減 ウ 危機 エ 辞職 オ 国営

1 日照 2 解禁 3 非常 4 利益 5 始末 6 予選